

編集後記

Crohn 病特集号が皆さんのお手もとに届くことになった。かつて Crohn 病は比較的縁遠い疾患と考えられてきた。ところが近年大腸・小腸疾患が内視鏡、レントゲン診断の進歩とともに、診断の対象となる機会が増してきつつあり、それに伴って Crohn 病も関心を集めるようになった。

最近の消化器関係の学会では、潰瘍性大腸炎および Crohn 病が頻繁に取り上げられるようになっている。ことに診断の対象として大腸疾患が早期癌、ポリープなどを含めて最近のトピックスとなりつつあるが、その一環として大腸の Crohn 病が話題となり、また実際にその症例を取り扱う機会も増してきた。

Crohn 病は診断の興味とともに、手術を含めての治療の問題が長期 follow up の必要性とともに内科、外科ともに重要な課題となってきた。しかし何といても本邦では大腸疾患としての潰瘍性大腸炎および大腸を含めての消化管の Crohn 病はその集積された経験症例も少なく、その方面の研究も欧米に比しておこなわれているといわざるを得ない。これから本格的にこの問題に取り組むべき時を迎えていると思う。この時期にこの特集号がこれからの研究の発展に向ってのひとつのステップとして役立てば大変幸いなものと思う。

＜城所 侑＞

＜編集＞ 早期胃癌研究会